



コミ協だより

第5号

み な と

発行日 平成23年 1月27日
発行 湊校区コミュニティ協議会
総務部会 編集委員会



去る十一月二十七日(土)「二葉コミュニティハウス」四階会場で、文教部会と湊地区社会福祉協議会の共催による「マジックショー&もちつき大会」を開催いたしました。
これは湊校区の小学校児童や幼児、PTAや地域の皆様方が

三世代交流

マジックショー&もちつき大会

楽しく面白く美味しいものを

文教部会長 大野 義彰

一緒に、楽しく面白く、又美味しいものを味わって頂く企画はないかと考えておりました。前記の「マジックショー&もちつき大会」の企画となったものであります。

当日は、予想はずれの快晴に恵まれ、「ふれあいスクール」の児童約四十名をはじめ、PTA、地域の方々から来場頂き、およそ一〇名という予想以上のご参加を頂きました。「マジックショー」はクロスパルを練習場に、慰問活動をされている「マジックワールド」の六名の皆様に出演頂きました。アマチュアで、時折ネタバレがあったり、子供達とのやり取りが、とても楽しくアツという間の五十分でした。

「もちつき大会」は、業者より借用のウスとキネを会場に運び入れ、一ウスのもちつきの

準備が出来た時には、裏方で用意して頂いた、キナコとアンコもちを一〇〇人分配ることができ、食べながら見学して貰いました。一ウスのもちがつかせると、お代り、お代りの声が出て、もち作りが間に合わないほどでした。二ウスの目は、子供達にも交代でもちつきを体験して貰いました。キネの重さに四苦八苦の様子が見え、ユウモラスで、楽しい笑いを誘いながら、もちつきを終了。お腹一杯の子供達の満足そうな言葉で、無事もちつき大会を終了いたしました。
初めてのマジックショーと久しぶりのもちつき大会ということで、参加者はどうか、もちつきの進行はどうかと、やきもきいたしました。が、「ふれあいスクール」のサポーターの方々やPTAの皆様のご協力により、和やかで、楽しい大会となりました。ことに心より、感謝しております。
今後とも、三世代交流をはじめ地域の皆様に楽しんで頂けるよう努めてまいりたいと思っております。皆様のご協力、ご参加本当に有難うございました。以上

友愛訪問と おせち料理の配布

厚生部会長 三條 澄

友愛訪問の取り組みを始めて、三年が経ちました。最初は二ヶ町内会からのスタートでしたが現在十五町内会の輪が広がりました。原則七十才以上の一人暮らし世帯等へ月一回定期的に訪問し、声をかけることで何時までも、元気で安心して暮らしていただけるようにと、地域の方々のご協力をお願いして活動しております。

十二月三十日には、例年通りささやかではありますが、おせち料理の配布をいたしました。今年は、万代シルバーホテルの「おせち」で皆様からは、たいへんおいしいと喜んで頂きました。この活動が湊校区全体に広がり、近隣の助け合いの輪が広がります。お願い致します。

二葉の中学生 「一歩」踏出す

中央公民館 伊藤 義則

中央公民館では八月八日、九日の二日間、「ジュニアリーダー育成講座」を二葉中学校で校区内の小学校やコミュニティ協議会、青少年育成協議会などの協力のもと開催しました。



参加した中学生十六名がグループ活動の中で、大人の指示

湊コミ協への 担当職員紹介

昨年度より各コミ協との円滑な運営ができるようにと、新潟市では担当する職員を指名されております。

すでに両氏ともに私たちコミ協のよきアドバイザーとして活躍いただいております。お二人をご紹介いたします。



湊校区コミュニティ協議会の担当をしている中央公民館の伊藤と

います。

地域のみなさんと出会い、ともに取組み、また、そのお手伝いが出来ればと思っております。どうぞよろしく申し上げます。



中央区役所健康福祉課の町永です。先日は、三世代交流会に参加

させていただき、みなさんから気兼ねなく声を掛けていただき楽しい時間をありがとうございました。これからも担当職員として、お手伝い出来るようがんばりますので、よろしくお願いたします。



新潟シテイマラソン大会

沿道ボランティアあれこれ

総務部会

予報に反し絶好のマラソン日和となった十月十日。第二十八回新潟シテイマラソン大会は、名称・コースを一新し、全国から八千三百人（ハーフ含む）も参加で、華々しく開催されました。

コースの変更に伴い初めて湊校区コミ協に、沿道ボランティアとして九十名の要請が参りました。

私たちコミ協では早速、文教部会とスポーツ振興会の役員とで、大会に協力すべく、対応策を相談いたしました。

一番の問題は、九十名もの要員をどのように働きかけるか。

それも担当する地点が三十五km地点で、ランナーにとっても大変厳しい地点であることや、現地での活動時間も、午前九時三十分から午後一時三十分頃まで拘束されることなど、かなり労力を要することが想定できることから、役員が直接お願いできる環境を考慮し、コミ協に属す



る団体やスポーツ振興会各チームを中心に要員確保にあたりました。

また、昔から祭り事の無い地域で九十名の方々に協力願いを、集まる機会は、滅多にないことなので、次に繋がる取り組みをしたい、と全員参加の昼食会を企画して皆さんの労を少し

区自治協議会の役割について

会長 長谷川守英

私達の身近な町作りや地域課題の解決のため、住民や地域の諸団体等の主体的な参加を求めつつ、多様な意見の調整及び取りまとめ。行政と連携し、市との協働の要として役割を担う。

委員構成はコミ協選出二十三名、公共団体選出五名、学識経験者二名、公募員四名、市長認定一名、三十五名の委員が月二回の本会議と所属する専門部会に出席する。本会議の議事は事前に提示された議題で、(例)コミ協事業補助金、学校と地域問題、APEC開催、新公共交通システム等々)部会は「拠点と賑わいの町」、「人にやさしいまち」、「水辺とみなとの町」の三部会です。筆者は「拠点と賑わいの町」部会で、古町、中心市街地の再生、新公共交通システム等の検討に努めています。このテーマに原稿一枚では、至難の限りで、次回に託します。

身近な防災について

防災安全部会長 森山 正邦

「災害は忘れた頃にやってくる」

ひと昔前から伝聞されてきた言葉ですが、人ごとではなく、自ら或いは近隣同志、日頃から意識を高めあつてゆく必要性があることから防災安全部会では、昨年度に引き続き今年度も十一月六日に二葉コミハウスに於て「**防火・防犯研修会**」を実施いたしました。

当日は各町内会長さんや、防火婦人部の皆さんから声を掛けあつていただき、八十名以上の参加があり、熱心に受講していただきました。

「防火」につきましては、中央消防署附船出張所の古山所長から**住宅防火**について講演がありました。特に強調されていたことは、「火災を出さないよう注意することは勿論、不審火対策に備えて日頃から家の周りなどに、燃えやすい物を置かな



いこと、また火災から逃げ遅れないように、まだ設置されていないご家庭では、早めに**火災警報器**の設置をお願いしたい。」とのお話でした。

次に「防犯」の講演では、中央警察署生活安全課大谷係長より「身近な犯罪」についてお話



しされました。

絶えることのないオレオレ詐欺、還付金詐欺、架空請求詐欺、融資保証金詐欺など、ますます悪質な手の込んだ詐欺事件が多発していることから、「まず疑い!! すぐ確認!! すぐ相談!!」その心が一番です。

他には、自転車の盗難や万引、高齢者の交通事故などと、私たちの周りには注意し、気を付けなければならぬことが沢山あります。被害者とならないよう、お互い注意いたしましょう。と講演を結びました。両氏ともにビデオを上映しながらの説明で、大変分かり易く参加者みなさんの関心を呼ぶにふさわしい研修会となりました。

住宅用火災警報器の設置が義務付けられました!

住宅用火災警報器があなたの命を守ります!

住宅用火災警報器は設置しましたか?
今お住まいの住宅にも、平成23年5月31日までに設置が必要です!

また、今年度防災安全部会では他に、九月に「**救急法講習会**」を同じく附船出張所所員のご指導により、AEDを使用した人工マッサージを全員で体験し、実りあるひと時を過ごすことができました。

防災とは「自分の大切な人を守ること!」、その為にはやるべき事があるはず。日頃から家族での話し合いや、地域のコミュニケーションなど、出来る事から初めてみませんか。



プロフィール

蒲原 宏氏

- ・日本歯科大学医の博物館顧問
- ・俳誌「雪」主宰
- ・蒲原浄光寺老院



校区の知的遺産を世に

蒲原 宏

一と昔前まで、いわゆる新潟島の住民を「上のシヨ」と「下のシヨ」と呼び分けていた。

「上の衆」「下の衆」の新潟訛なのだが、湊校区の人たちは純粹の「下のシヨ」だ。

下町でなく、新潟では榎谷小路から信濃川の下流地区を下町

と呼ぶが、古町、西堀・東堀・本町・上大川前の六・七・八・九番町の人達は、広小路から下町と考えていたようだ。

八十年前頃は、小学生仲間では「貧乏学校」と他校の生徒からからかわれるほど貧しい人たちが多かった校区であった。私

が湊校に学んだ昭和五年頃は、中食を持って来れない欠食児童が多く、父兄会の有志が金を出し合って同気食堂という店から弁当をとり給食

させていた。県内学校給食の最初の試みで、昭和十一年頃まで続いた。旧制中等学校への進学率も低かった。唯一誇れるのが市内少年少女オリンピックという陸上競技大会で、毎年第一位となることであった。

全校生徒千二百人位の時代だった。また全市内の水泳大会でも毎年隣りの栄校と一、二を争っていた。

生徒も多かったので競争心も旺盛だった。中等学校へ進学しても「貧乏学校出身」と、蔑まれるので、反発して頑張る人が多かった。私の記憶にあるのに

若松栄一厚生省医務局長、小島碩夫群馬大学医学部教授、中山沃岡山大学医学部教授、青木忠男ニューヨーク・ソーランケツ

タリング癌研究所教授などが医者仲間。実業界では敦井栄吉氏をはじめ数えきれぬほどの人が出ている。

画家の三好悌吉、近年では鷺尾いさ子も湊校出身。校区から

は人気漫画家、高橋留美子がいる。

しかし、現在の下町、湊校区の人々の生活・文化とは、それほどの関りが無い。正に無縁社会の一現象。これらの人が世に出てもサポート組織ができないのだから当然のこと。

校区は蟬の抜け殻のようなものである。生徒の溢れた時代は遠の昔。今年の湊校の入学児童六人(男一・女五)というから何れ合併・廃校も止むを得ぬことになろうか。

昭和三十五年頃からの高度成長の流れの中で、急速に環境が整えられては来た。しかし、昭和五十年頃から、地区人口の流出が始まった。日本の少子高齢社会そのものを象徴するように、地区の衰退が加速されてきた。近代商業形態の変化にとまない、下の市場の様相も激変し、いわゆる下町情緒も甚だ薄れてきたし、元々文化的施設というものがない地区であったか

ら文化サークルもなかった。

辛うじて湊校の卒業生、坪井泰蔵さんが「しもまち句会」を立ちあげ、北部コミセンを利用して定例会をやってきた。もともと湊校出身者には写生派の俳人が多い。

故人では句集『竹馬』（昭和五十九年刊）と、句集『春隣』（平成十七年刊）を残した福田忠（一九二二—二〇〇四年）は高野素十、中田みづほ両先生の高弟の一人。

酔つて子の 話聞きやり
炉辺の父
手術甲斐 なかりし父や
みゝず鳴く
八十の 父をいたはり
春惜しむ
欠航の 海を見てをり
梅雨の宿
孫を守り くだびれて今
母屋寝
などの情緒と余韻のある分かり易い俳句を生涯作りつづけた。

女流俳人ではやはり高野素

十、中田みづほ両先生の高弟で、句集『夏柳』（平成十八年刊）を残した小林いまよ（一九三〇—二〇〇七年）がいた。

老父母に 逢ひに来てあし
春炬燵
苗礼の みな点字なる
花壇かな
新潟は 生涯の町 夏柳
春愁の 膝に重ねて
置く手かな
蓮根を 掘り並べたる
雪の上
クリスマス からの毎日
雪日記
少女の日 遠し草笛
吹いてみし
孫膝に グリム童話の
読初め
七夕の 願い忍者に
なりたい子
閉ざされし 夢二ゆかりの
雪の宿
まことに平易で余韻のある作

品である。学歴が高いこともないし、社会的地位があったわけでもないが、書も絵も巧かった。二人とも穏やかな「下のシヨ」であった。

抗癌剤の治療を拒否して自然死を選んだ女流俳人は、死の直前の病床で筆をとり、

我迎へに 来るらし淡き
春の雲

と、辞世の句を遺した。娘さんが母に習った俳句を続けている。二人の下町の俳人はわかりやすい佳い俳句を数多く残した。

新潟大学医学部長でもあった高野・中田両先生の教えを守り、新聞俳句やマスコミ雑誌の懸賞俳句の募集には見向きもせず、求道的に師の訓のまま生涯俳句を作りつづけてこの世を去った。まさに下町の一刻者の俳人であった。また、句集は残さなかったが湊校出身の洋服仕立職人で

あった栗川蝸牛という早逝の俳人もいた。佳い句を作った。文化施設が無くとも、積極的に良師を求めて刻苦、努力し、地味ではあるが素晴らしい文化芸術作品という知的遺産をこの世に残した、誇り高い「下町のシヨ」たちである。

世の知る人ぞ知る下町生まれの人たちの文芸作品を、湊校区内の神社やお寺、公園か町角にでも句碑を建て、後世に伝えてあげられないものだろうか。

これらはやがて地区の文化の証となるはずである。

新しい街灯ができる。その傍に句碑や歌碑、誰々生誕の地の標柱がひっそりと建っている。そんな下町の景観が生まれてもよいのではないか、と老人の私は夢を描いている。ゆっくりとした文化・教育の発展とは、こんなことから始めたらよいのではなからうか。